東京講演会を開催

10月24日に東京の有楽町朝日ホールにおいて、「発掘遺構から読み解く古代建築」と題した東京講演会を開催しました。

2010年に竣工した平城宮第一次大極殿は、今や平城宮跡のシンボルとして国内外の皆様から親しまれています。

復原された第一次大極殿は、平城遷都1300年の節目にふさわしい古代建築に関する緻密で高度な学術研究の成果が結実した建物となりました。復原に向けた調査・研究には20年の月日をかけて取り組み、建築史の研究の進展に寄与する数々の成果をもたらしました。

近年、全国各地の史跡でも建物の復原や整備活用事業が進められています。建物の復原の場合だけでなく、イラストやCG、模型の製作等でも、建築史の知識や情報が不可欠です。このような建築史の研究は、一般には知られていないのが実情です。

今回の講演会では、発掘された地下遺構から失われた地上の建物をどのように復原できるのか、というテーマにしました。6名の研究員が発掘遺構や出土建築部材、現存する文化財建造物、絵画資料や文献史料等の調査・研究を通して建物の復原研究に取り組む建築史研究者の仕事ぶりと研究の舞台裏も交えて話しました。また、平城宮の朱雀門や第一次大極殿の復原研究のプロセスや復原根拠、これから復原工事が本格化する第一次大極殿院の南門や東西楼、築地回廊等の復原研究の最新成果、遺跡から出土する建築部材をめぐる研究等についても紹介しました。

当日、345名の方が来場され、メモを取りながら熱心に聴き入る方も多く見受けられました。

（研究支援推進部　津田 保行）

東京講演会風景